公開講演会記録

茨木のり子の脱境界的詩作
――韓国と中国への眼差し

立教大学兼任講師　金智英

はじめに

茨木のり子は、戦後日本社会の問題を詩作を通じて描いた詩人で、その作品は教科書に載るなど広く読まれている。代表作としては、戦後の様子を女性の立場から描いた「わたしが一番きれいだったとき」が挙げられる。まずは詩を紹介する。

わたしが一番きれいだったとき
街々はがらがら崩れていって
とんでもないところから
青空なんかが見えたりした

わたしが一番きれいだったとき
まわりの人達が沢山死んだ
工場で　海で　名もない島で
わたしはおしゃれのきっかけを落して
しまった

わたしが一番きれいだったとき
だれもやさしい贈物を捧げてはくれな
かった
男たちは挙手の礼しか知らなくて
きれいな眼差だけを残し皆発っていっ
た

わたしが一番きれいだったとき
わたしの頭はからっぽで
わたしの心はかたくなで
手足ばかりが栗色に光った

わたしが一番きれいだったとき
わたしの国は戦争で負けた
そんな馬鹿なことってあるものか
ブラウスの腕をまくり卑屈な町をのし
歩いた

わたしが一番きれいだったとき
ラジオからはジャズが溢れた
禁煙を破ったときのようにくらくらし

ながら
わたしは異国の甘い音楽をむさぼった
わたしが一番きれいだったとき
わたしはとてもふしあわせ
わたしはとてもとんちんかん
わたしはめっぽうさびしかった
だから決めた　できれば長生きすること
年とってから凄く美しい絵を描いた
フランスのルオー爺さんのように
ね

この詩のように、茨木の詩作は、個人的な経験と社会的な問題を結びつけて、特に戦後日本社会の貧困や混乱、そして個人の喪失感などを描き出している。その彼女は１９７５年に夫である三浦安信が肝臓がんで亡くなった後、新たな挑戦を求めて１９７６年に韓国語を学び始める。それは、茨木がその後の文学的活動において韓国との深いつながりを築く基盤となる。そして１９９０年に『韓国現代詩選』（花神社）を翻訳出版して、韓国文学の日本への紹介に貢献した。

そこで本稿では、茨木のり子がどのようにして韓国に対する情熱を抱いて、その情熱が彼女の詩作活動にどのように影響を与えたのかを紹介したい。また、彼女が韓国だけでなく、中国や他の国にも深い関心を持ち、その文化や詩に触れ、理解を深めようとした努力についても触れる。最後に、茨木のり子の脱境界的な詩作の意義と彼女のメッセージを通じて、現代に生きる私たちが学ぶべきことについて考察する。

１．詩作の始まり

１．１　生い立ち

茨木のり子は１９２６年に大阪で生まれた。１９４３年、17歳のときに帝国女子医学薬学専門学校薬学科に入学し、１９４５年には19歳で学徒動員され世田谷区にあった海軍系の薬品工場で働いた。そして１９４９年、23歳のときに医師の三浦安信と結婚して、埼玉県所沢市に住むようになる。そしてこの頃から詩も書き始め１９５３年には、詩人仲間で同じ詩学研究会に投稿していた川崎洋とともに同人詩誌『櫂』を創刊した。同誌は谷川俊太郎、大岡信など多くの新鋭詩人を輩出していく。１９７５年、49歳のときに夫の三浦安信が肝臓がんで亡くなり、１９７６年、50歳のときから韓国語を習い始める。１９９０年には64歳で翻訳詩集『韓国現代詩選』を刊行した。１９９９年、73歳のときに『倚りかからず』を刊行し、15万部の売上を記録して、２００６年79歳のときにくも膜下出血のため、東京の自宅で亡くなった。

１．２　初期詩に現れる社会意識

上記のように茨木は１９４９年に結婚して、この頃から詩も書き始めたが、まずこのことに注目してみたい。彼女は当時のことを自らのエッセイ「はたちが敗戦」で次のように書いている（傍線は筆者による）。

夫は勤務医で、彼もまた医学の新し

い在りかたを求めて意欲的であった。米も煙草もまだ配給で、うどんばかりの夕食を取りながら、エドガー・スノウの『中国の赤い星』を一緒に読みあったのはなつかしい思い出である。二十五年間を共にして、彼が癌で先年逝ったとき、戦後を共有した一番親しい同志を失った感が痛切にきて虎のように泣いた。（茨木「はたちが敗戦」）

当時夫である三浦安信は彼女の詩作を応援していたことがわかる。また、反戦運動をしたアメリカのジャーナリスト、エドガー・スノウの『中国の赤い星』に言及しているが、実際茨木が当時この本に影響を受けて書いたとみられる詩があるので紹介したい。「ひそかに」という詩である。

節分の豆は
むかし
ジャングルにまで撒かれたが
巨濤
をみとどけた者はいない
（中略）
みんなふやけて還ってきた
颯颯と箒でまとめられ
中に一粒のエドガア・スノウすらまじえずに
（後略）

この詩で「節分の豆」は、戦争に行かされた日本の若い兵士たちで、彼らは「撒かれた」ときと同じように、戦争が終わると「颯颯と箒でまとめられ／中に一粒のエドガア・スノウすらまじえずに」「みんなふやけて」日本に還ってくる。戦争でたくさんの若者が命を奪われたが、還ってきたものは「みんなふやけて」いたこと、つまり、戦前、天皇を基軸とした世の中を樹立するという使命感を持って、命を落とすことをも覚悟して戦場に行った若い兵士たちが、還ってきて無気力でいることに対して、彼女は「おびただしい死の宝石をついやして／ついに／永遠の一片をも掠め得なかつた民族よ」と嘆いている。「ひそかに」は、詩を書き始めた頃の茨木のり子の社会意識と批評精神がうかがえる作品の一つである。茨木のこうした激しい詩の表現からは、時代の持つ課題を率直にうたい出そうとする作者の意思がみられる。

2．茨木のり子の生涯と詩作活動

2．1　詩人としての出発『櫂』

茨木のり子の詩作は、戦後の貧困と混乱の中で始まった。戦後詩の主流を占めていた『荒地』や『列島』の詩人たちは、新しい世代に席を譲り、１９５３年には『櫂』『氾』『獏』の三つの雑誌が創刊された。茨木と川崎洋が創刊した『櫂』には、谷川俊太郎、舟岡遊治郎、吉野弘などが参加し、詩誌は第11号でいったん休刊するも、１９６５年に再刊されて１９９７年まで続いた。

『櫂』の創刊号には川崎の「にじ」と茨木の「方言辞典」が収録された。前章で紹介した「ひそかに」は茨木のり子が創刊号のために「方言辞典」と

ともに「宣言」の題で出した詩であったが、川崎は「創刊号には〈方言辞典〉だけを貰う」（茨木「「櫂」小史」）と述べ、「宣言」の方は茨木に返したと言う。後ほどこの「宣言」の詩を直したのが「ひそかに」という詩である。

この逸話からもわかるように茨木と川崎は詩に対する考えの違いを明確にした上で、同人として出発したのである。後ほど谷川俊太郎が「基本的に茨木さんは正しいことを書く詩人」（谷川「生活の形を変えなかった人」）と述べたように初期の茨木の作品の多くは、自身と戦後日本社会を反省的にとらえた、ある意味でメッセージのある教訓的な内容を含んでいた。

2．2「骨格」確かな「日本語の語感」で書かれた詩を求める

「「櫂」小史」で茨木は、「櫂は文学運動でもなかったのだが、「荒地」や「列島」が表現し残したものを、埋めようという、本能的な衝動のようなものは、皆に共通にあったような気がしてならない」（茨木「「櫂」小史」）と述べた。敗戦後の詩運動の中で、特に挙げられているのは、『荒地』と『列島』である。『荒地』は戦前のモダニズム詩の系譜を受け継ぎ、戦争体験から生じた失意感を表現し、『列島』はプロレタリア系の詩人たちが集まり、政治と詩の芸術性を融合させようとした。ここで茨木が「「櫂」小史」の中で、「敗戦後の詩運動はおおむね、骨格ばかりのようで、水気、色気、うぶ毛などがいたって乏しく感じられた」「多くの詩が日本語の語感では書かれていないという、大いなる疑惑と不満を持っていた」（茨木「「櫂」小史」）と述べたのは注目に値する。つまり、茨木は思想性やメッセージ性に力点を置いたプロレタリア詩と、言葉の芸術性を主張したモダニズム詩を批判しながら登場した『荒地』『列島』に「疑惑」と「不満」を抱きつつ詩作を始めたのだ。茨木が追求した詩とは「骨格」（思想性）の確かな、「日本語の語感」（芸術性）で書かれた詩であった。

『櫂』は１９５７年にいったん終刊となるが、その経緯については明確ではない。編集長であった川崎洋から茨木への手紙には、「同人はそれぞれ皆、個人の仕事へと比重が変ってきた。グループ単位でしか物を見れない、昨今の怠惰な風潮にも一発くらわせたく、櫂も解散にふみきった」（茨木「「櫂」小史」）ことが記されている。この発言から『櫂』は単一の運動としての主張を行うのではなく、個々の詩人の表現の場であったことが垣間見える。

以上のように『櫂』は個々の詩人の個性を重視した詩誌であり、戦後詩の中で独自の立場を持ち、『荒地』や『列島』とは異なるアプローチで戦後詩を展開した。

その後茨木は１９５５年に第一詩集『対話』を刊行する。そこには先ほど紹介した「ひそかに」のような詩、例えば「いちど見たもの」や「根府川の海」など、主に敗戦後の日本社会のあり方、戦争によって失われたもの、指導者たちへの批判、歴史問題などをテーマにした詩が多く収録されている。

3．脱境界的詩作

3．1　隣人愛の詩人

茨木のり子は、戦後日本社会の直面するさまざまな問題を取り上げて詩作を続けたが、彼女は日本という祖国だけではなく、在日朝鮮人、ユダヤ人など、他者にも目を向けていた。関連作品としては「行きずりの黒いエトランゼに」「ジャン・ポウル・サルトルに―ユダヤ人を読んで」「奥武蔵にて」「七夕」「うしろめたい拍手―梅蘭芳に」「りゅうりぇんれんの物語」「くりかえしのうた」「顔」「隣国語の森」「あの人の棲む国」などが挙げられる。特に「うしろめたい拍手」と「りゅうりぇんれんの物語」は中国に関連している作品である。ここでは「七夕」「行きずりの黒いエトランゼに」「うしろめたい拍手」「りゅうりぇんれんの物語」を紹介したい。

「七夕」の背景になっている「安達が原」は現在の福島県にあたり、「鬼婆伝説」で有名な場所である。「七夕」は、初期の茨木における「朝鮮」に対する認識を考えるうえで最も大事な作品である。「朝鮮語の華々しい喧嘩」や「古い恩師の後裔たち」「尾行かと恐れている」などの詩句から、ここが差別と監視のもとで生活している韓国人の集落であることがわかる。「何世帯住んでいるのかわからず／あばらやを出たり入ったりするひとびとは／いつも謎めいて数えることができない」「犬までが他人を寄せつけず獰猛に吠えかかり」などと描写しているように、その場所は、未知の場所であり、恐怖を感じさせる場所であるのだ。さらに、この詩で注目を引くのは最後の連、「たなばたの一言で急におとなしく背を見せて／帰って行ったステテコ氏／わたしの心はわけのわからぬ哀しみでいっぱいだ」とうたったところである。ここに述べられている「哀しみ」とは、「多くのもの」を「齎された」「古い恩師の後裔たち」が、今は「あちらでもこちらでも」「さりげなく敬遠され」「夕涼みの者をさえ　尾行かと恐れている」ことへの哀しみである。この哀しみは他の詩においても共通して現れ、それらの本質は、敗戦にまつわる差別問題にあるという点で共通している。

「行きずりの黒いエトランゼに」は1950年の7月11日に小倉（現北九州市）に駐留していた米軍25師団24連隊からの集団脱走をモチーフにしている。第一連～第三連に「路上　何か問いそうな黒人兵のしぐさ／／気がつくと／目にもとまらぬ迅さで私は能面をつけ／あなたの質問を遮断していた／／澄んだ瞳にありありとのぼる哀愁……」とあるが、ここで「目にもとまらぬ迅さ」で「質問を遮断」する行為とは、黒人兵に対する先入観から生じた強い拒否の表出なのだ。その行為をまともに受けた「黒いエトランゼ」は「澄んだ瞳」に哀しみを浮かべる。ここで茨木は「おもえばおかしな世界である」と述べ、先入観による行為が、それを受ける一人の人間にどのような哀しみを与えるものかを描いている。

「うしろめたい拍手」で詩人は「強

いられた芝居をするくらいなら／髭をはやしてしまったほうがましと／本当に髭をはやしてしまったという名女形／（中略）／名優に髭をはやさせてしまったのもわれらの軍隊／／悔恨と謝罪を塩のように含み／幸せの足下に強く踏み躙ったもののあることを／どこかで深く知っている」とうたっている。このように茨木はあらゆる形で迫害される民族に哀しみを抱くと同時に、そのような状況を「強いられ」る不条理な世界が、「おかしな世界」であることを読者に問いかけているのである。

「りゅうりぇんれんの物語」は、朗読だけで30分以上かかる長編詩である。彼女はこの作品を通じて、戦争の悲惨さを生々しく描き出した。戦争によって引き起こされた人権侵害や苦難をリアルに描くことで、読者に対して戦争の悲惨さを強く訴えかけている。この詩は、１９４４年に日本軍に強制連行され、中国から日本の北海道にやってきた劉連仁の壮絶な逃亡生活を描いている。彼は過酷な炭鉱労働から逃げ出し、14年間にわたり１４００キロの道のりを転々としながら生き抜いた。茨木のり子は日本から迫害を受けた「りゅうりぇんれん」というある特定の人物を、一人の人間として具体的に生々しく描いてその不条理性を焦点化させ、メッセージをより効果的に伝えている。

３．２　ハングルを学ぶ動機

日本社会だけではなく、韓国人、中国人、日本に住んでいる在日朝鮮人や黒人兵士、つまり偏見や差別、迫害を受ける人々のことをもうたった茨木のり子は、１９７６年からハングルを学び始め１９９０年には『韓国現代詩選』を翻訳出版した。茨木がハングルを学び、韓国文化に関心を寄せた背景には、彼女の人生と文学活動に深く根ざした複雑な動機が存在する。これを理解するためには、彼女の作品やエッセイ集『ハングルへの旅』（１９８６年）を検討し、その中で明らかにされた彼女自身の言葉を追求することが重要である。そこで本稿では、拙著『隣の国のことばですもの―茨木のり子と韓国』で分析した内容の要約として、茨木のエッセイ「動機」を中心に、彼女が韓国への情熱を抱いた背景について紹介する。

まず、茨木が韓国詩に関心を持つようになったきっかけとして、幼少期から抱いていた韓国の歴史や文化への深

い興味が挙げられる。その初期のきっかけは、金素雲の『朝鮮民謡選』（岩波文庫、１９３３年）を15歳の頃に愛読した経験であり、これが後の彼女の韓国文化に対する深い興味となる基盤を築いたと思われる。彼女は金素雲の『朝鮮民謡選』について、「言葉のわかりやすさ、素朴さ、愛情表現の機智に惹かれたのかもしれない」（茨木「動機」）と述べている。さらに、茨木は古代史にも強い興味を抱いており、特に日本と朝鮮の歴史的な関わりについても深く掘り下げていた。彼女は金思燁の著書『古代朝鮮語と日本語』に触発され、古代朝鮮語にも関心を寄せていた。このような歴史的な関心が、後にハングル学習につながる重要な動機となったといえよう。

さらに、茨木の家族背景も彼女の韓国文化への関心に影響を与えたと思われる。特に母方の祖母は、11歳のときに母を亡くした茨木にとって重要な存在であり、祖母もまた朝鮮文化に深い興味を抱いていた。陶器が好きだった祖母は、生前「朝鮮に行きたい、朝鮮に行きたい」（茨木「動機」）と言っていたという。祖母のことについて茨木は、「陶器への憧憬からだったろうが、もしかしたら祖母自身、その血の中にかなり色濃く渡来系を秘めていたのではなかろうか」（茨木「動機」）と述べている。この発言は自分自身に対しての言葉としても理解できる。祖母の陶器や朝鮮に対する情熱は、茨木の人生において韓国文化への感情的な結びつきを強める一因となった。それを裏付ける作品として茨木がハングルを習い始める前に書いた詩で、１９７１年８月『草月77』に発表された「顔」という詩がある。茨木は、「顔」で自分の顔についても書いている。彼女は「あなたの顔は朝鮮系だ　先祖は朝鮮だな」と言われたことに対して「たぶん　そうでしょう」といい、第三連で「パミール高原」に対しても同じ態度をとっている。それは、自分のルーツが朝鮮であり、遠くみるとパミール高原であることを意味する。つまり、この詩は、大昔パミール高原から朝鮮を経て、日本にたどり着いた先祖の末裔が現在の自分であるとの自己確認を試みているものである。彼女は詩を通じて、自らのルーツや文化的アイデンティティを探求し、理解することを望んでいたのだ。このような文化的アイデンティティの探求は、彼女の作品においても重要なテーマとなり、日本と韓国の文化的な交流を促進する役割を果たした。

もう一つ、茨木のり子がハングルを学び始めた動機として、戦争によって生じた自責の念を挙げることができる。茨木は韓国の女性詩人である洪允淑（ホンユンスク）（１９２５～２０１５）と交流していた。彼女は洪と出会ったときのことを「動機」で次のように回想している。

「日本語がお上手ですね」
その流暢さに思わず感嘆の声をあげると、
「学生時代はずっと日本語教育されましたもの」
ハッとしたが遅く、自分の迂闊さに恥じ入った。日本が朝鮮を植民地化し

た三十六年間、言葉を抹殺し、日本語教育を強いたことは、頭ではよくわかっていたつもりだったが、今、目の前にいる楚々として美しい韓国の女と直接結びつかなかったのは、その痛みまで含めて理解できていなかったという証拠だった。

（中略）今度はこちらが冷汗、油汗たらたら流しつつ一心不乱にハングルを学ばなければならない番だと痛感した。

いつか必ず。これも動機の一つである。（茨木「動機」）

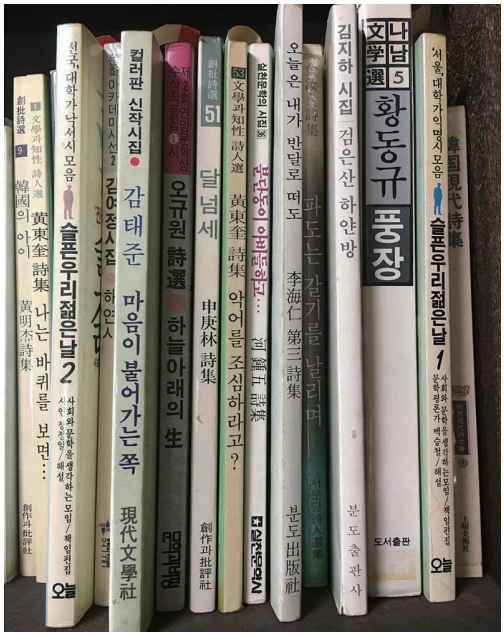
同じ状況と思われる場面を『言の葉さやげ』所収のエッセイ「まあ　どうしましょう」でも述べている。また、こうした自責の念は、「隣国語の森」という詩にも現れる。三つの作品で共通して自責の念としてのハングル学習に言及していることから、その決意の強さがうかがえる。そして、この決意を実現させたきっかけが、夫の死であった。一番近い存在であった夫の死を受けて、茨木は「女の自立」（茨木「はたちが敗戦」）を成し遂げなければならなかった。このことについて彼女はエッセイ「はたちが敗戦」で次のように述べている。

戦後あれほど論議されながら一向に腑に落ちなかった〈自由〉の意味が、やっと今、からだで解るようになった。なんということはない「寂寥だけが道づれ」の日々が自由ということだった。

この自由をなんとか使いこなしてゆきたいと思っている。

茨木は、それまで必ずしも意識的な対象ではなかった韓国を夫の死から得た自由により自分の意志で具現化していった。具現化した韓国は当然彼女の詩作へとつながっていった。

以上からわかるように、ハングルを学び、韓国文化に深い関心を寄せたのは、単なる言語学習の動機を超えた複



韓国関連書籍（左）、『韓国現代詩選』で紹介された詩人たちの詩集（右）が並ぶ茨木のり子の書棚の一部

雑な要因によるものであった。彼女の人生、文学的探求、家族背景などが複合的に絡み合い、彼女を韓国へと導く道筋を形成した。その結果、彼女は日本と韓国の文化交流に貢献する重要な文学的な懸け橋となった。

4. 韓国への情熱

4. 1 『韓国現代詩選』

『韓国現代詩選』（1990）は1987年から1989年の3年間に季刊詩誌『花神』に連載された詩を中心に編纂されたアンソロジーである。この訳詩集には、12人の韓国現代詩人による62篇の作品が収められている。本稿では、紙面の都合により12人の韓国の詩人とその訳詩を紹介することができないため、個別の詩人の紹介ではなく、全体としての特徴に焦点を当てることとする。

一つは、紹介されている詩人は、初期の詩の傾向が異なっていたとしても、次第に社会の現実や時代意識を反映した詩を書いている詩人たちという点である。

次は、ほぼすべての詩が平明な言葉で書かれており、そのメッセージがわかりやすくなっている点である。

最後は鄭玄宗（チョンヒョンジョン）、李昇薫（イスンフン）、金春洙（キムチュンス）のように、当時の韓国詩壇に大いなる業績を残した詩人たちが茨木の『韓国現代詩選』には紹介されていないという点である。これらの詩人たちは、各自の内面世界に目を向け、精神の自由はうたっていたものの、社会問題などを直接うたっていないという点で、『韓国現代詩選』に紹介されている12人の詩人たちと相違点を持つ。茨木が『韓国現代詩選』のあとがきで「韓国には韓国の詩壇地図があるわけだが、それをなぞろうとは思わなかった」と述べているように、茨木は「自分の気に入った詩」（茨木『韓国現代詩選』）を集めたのだ。

また、茨木はかつての『荒地』や『列島』の詩がモダニズム詩とプロレタリア詩の限界を克服できなかったことを受けて、自らが「骨格たしかな」（思想性）、「日本語の語感」（言葉の芸術）で詩を書くことを決意していたように、韓国の現代詩に接した際も「骨格」と「語感」で詩を評価しようとする傾向があったと考えられる。

茨木の韓国現代詩翻訳は、韓国の詩が持つ独特の感性や表現を日本の読者に伝えることに成功し、両国の文学的交流を促進した。その功績が評価され、1991年には読売文学賞（研究・翻訳賞）を受賞した。

4. 2 韓国における茨木のり子

茨木のり子はハングルを学ぶなど、韓国に対して関心を寄せていたが、彼女の作品は韓国においてどのように受容されていたのだろうか。実際、彼女の詩「わたしが一番きれいだったとき」のタイトルは、韓国において一人歩きし、多くの作品のタイトルとして使用されている。その代表的な例として、コン・ソンオクおよびシン・イヒョンの小説が挙げられる。

コン・ソンオクとシン・イヒョンの小説、『わたしが一番きれいだったとき』は、作品の時代背景やキャラク

ターの個性、伝えたいメッセージなどにおいて多くの違いがある。しかし、社会的状況によって「一番きれいだったとき」を失った人物たちの物語を描いている点では共通点を持つ。『わたしが一番きれいだったとき』というタイトルは、１９４５年の解放後に続く南北戦争と分断、独裁体制と軍事政権、経済危機などという暗い時代を生きた韓国の女性たちに大きな共感を呼び起こしたのだ。混乱の時代を生きた人同士として奪われてしまった青春への愛惜の念に共鳴するものがあったからであろう。

茨木の本が単著として韓国に紹介されたのは、韓国をテーマに書いたエッセイ集『ハングルへの旅』で、同書は詩選集よりも先に２０１０年に翻訳出版されていた。詩選集が初めて刊行されたのは、２０１７年に刊行された翻訳詩選集『わたしが一番きれいだったとき』である。同書は日本で刊行された田中和雄選の『おんなのことば』の翻訳であった。そのため、茨木を広く知らせるきっかけとなった「倚りかからず」や、韓国を題材にした「七夕」、夫に対する愛をうたった「歳月」など、茨木を深く理解するために重要な意味を持つ作品が紹介されていないことは、極めて残念に思えてならない。

その後、２０１９年にボムナレチェクから茨木の２冊目の翻訳詩選集『はじめての町』が出版された。この本は訳者が直接『茨木のり子全詩集』から作品選定を行った。編訳者は太宰治、芥川龍之介、宮沢賢治、大江健三郎などの作品を訳したジョン・スユンである。同書には52篇の翻訳詩が収録されており、すべての詩の前には、原詩が紹介されている。52篇の詩の出典は茨木が生前刊行した９巻の詩集と詩選集、スクラップブックからで、作品選定や配列にも工夫したことがうかがえる。

「戦後詩の長女」と称され、戦後詩人を代表する詩人の一人である茨木のり子が、戦後70年以上を経た現在、韓国で詩集が出版されるなど話題となっている理由を考察することは興味深い。これは決して韓国の詩の水準が50年前に逆戻りしたことを意味するものではない。むしろ、生の意味を追求する姿勢は、時代や国を超えて普遍的に要求されるものであると考えられる。茨木の詩の核心は、戦後という時代との対話と対決の中で自己を確立することにある。このため、彼女の作品は国境を越えて韓国でも受け入れられているといえよう。

もう一つの理由として、韓国におけるフェミニズム文学ブームの影響も挙げられる。韓国では儒教思想が文化の根底に根付いており、依然として男性優位の考え方が残っている。そのため、韓国社会において女性たちは自らが置かれた不平等や矛盾に敏感である。１９９０年代に入り、民主化とともにフェミニズム運動が盛んになり、文学の分野では２０１７年にチョ・ナムジュの『82年生まれ、キム・ジョン』が１００万部以上の売上を記録した。同書は、女性の新たな生き方や矛盾に満ちた立場を感受性豊かに描き、多くの読者から共感を得た。茨木の詩には、現代のフェミニズムを直接意識

したものとは言い難いが、女性の生き方に対する追求にはフェミニズム的要素が含まれている。「わたしが一番きれいだったとき」はその一例である。女性の生き方に真摯に向き合う姿勢や、政府のみならず天皇まで批判する広い視野の批評精神が、韓国の読者の心を引きつけたと考えられる。

結び

以上、本稿では、茨木のり子が生きた時代的背景に注目しながら、茨木と韓国との関連性を紹介した。茨木のり子の詩作は、日本という枠組みを超え、韓国や中国といった他国への深い関心と理解を通じて形成されたものである。彼女の作品には、自身の経験や社会的な問題だけでなく、異文化への共感と理解が色濃く反映されている。特に韓国に対する情熱とその影響は彼女の詩作において重要な役割を果たし、異なる文化や歴史を詩の中で融合させることに成功している。彼女の詩作活動を通じて示された「脱境界」の姿勢は、現代においても大きな意味を持つ。国境や文化の壁を越えて他者を理解し共感することは、国際社会においてますます重要となっている。茨木の詩は、そのような姿勢を私たちに示し続けているのである。

参考文献

茨木のり子「「櫂」小史」『茨木のり子詩集』現代詩文庫20、思潮社、1969年、100〜124頁。
茨木のり子『言の葉さやげ』花神社、1976年。
茨木のり子『ハングルへの旅』朝日新聞社、1986年。
茨木のり子訳編『韓国現代詩選』花神社、1990年。
茨木のり子「はたちが敗戦」、山本安英「茨木のり子について」ほか『増補茨木のり子』花神ブックス1、花神社、1996年、71〜77頁。
宮崎治編『茨木のり子全詩集』花神社、2010年。
金智英『隣の国のことばですもの—茨木のり子と韓国』筑摩書房、2020年。
谷川俊太郎「生活の形を変えなかった人」『(文藝別冊)茨木のり子—没後10年「言の葉」のちから』河出書房新社、2016年、7〜11頁。

※詩の引用は『茨木のり子全詩集』(花神社)に拠った。
(2024年6月24日・公開講演会)

筆者略歴(キム・ジヨン)
1984年韓国ソウル市生まれ。2014年大東文化大学文学部日本文学科卒業、2016年立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻博士前期課程修了。修士論文は「尹東柱の翻訳問題からみる日韓関係」。2019年同後期課程修了。博士論文は「茨木のり子における韓国」。著書に『隣の国のことばですもの』がある。現在、立教大学兼任講師。